

拠点大学の概要及び採択理由

機 関 名	上 智 大 学
<p data-bbox="159 201 1332 235">国際化拠点の構想の概要】「グローバル化対応型人材育成のための国際化拠点形成の構想」</p> <p data-bbox="159 235 1436 548">本学はキリスト教ヒューマニズムの精神に基づき、「世界の人々と共に歩む」(Men and Women for Others, with Others) ことを教育の精神に掲げ、その実現のために「国際性」を重視し、様々な取組を先駆的に実践してきた。こうした実績に加え、近年のグローバル化のもとで、本学にも、我が国の大学の国際化をリードしようような新たな戦略がさらに求められている。そこで、本学では理事会が平成13年に決定した長期発展計画「グランド・レイアウト」において、国際的評価を受ける高等教育機関として成長し、国際交流の拠点としての機能を強化する目標を打ち出した。さらに、本年3月には、<u>大学全体のグローバル・コンピテンシー（学問分野の枠を超え、地球規模の問題に対応できるグローバル化対応能力）の向上を核とする教育・研究の国際化推進策を策定した。</u></p> <p data-bbox="159 548 1436 728">本構想は、本学の強みを活かした特色あるプログラムを新・増設することで、国内外から質の高い人材を引き寄せ、全学の学生が多様な留学生と切磋琢磨する環境を創出し、かつ日本人学生の海外留学を推進することで、今日のグローバルな国際社会で活躍できる人材を育成する基盤をさらに強化することを目的とする。取組実施にあたっては、優れた外国人教員の確保、少人数教育等を通じて国際的に見て魅力ある教育の質の確保を何よりも重視するものとする。</p> <p data-bbox="159 728 1436 1075">そのための具体策としては、まず学長の強いリーダーシップのもとに、国際戦略推進機構を新設し、グローバル・コンピテンシーを高めるための長期戦略や諸施策の企画・立案、総合調整さらには国際広報にまつわる機能を集中的に担わせる。これにより、本学の国際化の継続的進展を図る。その上で、<u>国外からの留学生受入人数を平成32年度末までに現在の1,000人から2,600人以上に増加させることを目標に、新たな英語コースの設置及び留学生受入環境の整備等の支援体制を大幅に拡充する。</u>一方、日本人学生のグローバル・コンピテンシーを高めるため、語学（特に英語）教育をより一層強化するとともに、多種多様な海外留学プログラムを新設・拡充して<u>長期・短期の海外留学者数を平成32年度末までに現在の400人から1,000人へと大幅に増加させる。</u>これらの取組を含め、国内外で以下に示す多様な取組を実施する。</p> <p data-bbox="159 1075 1436 1836">国内で実施する取組としては第一に、我が国が強みとし、世界的に需要が高まっている<u>環境理工学の分野で国際的に競争力のある教育プログラムを英語で提供し、海外から有望な理工系留学生の呼び込みを図る。</u>このため学部課程では、理工学部¹に英語のみで学位が取得できるコースを、大学院課程では地球環境学研究科に英語コースを設置する。このうち大学院のコースでは、環境理工学とともに、環境問題の社会的側面や開発・貧困との連関についても学べるように配慮し、今日の国際社会が直面する問題に直接貢献できる人材を育成しようとするプログラムとする。第二に、<u>英語による教育課程の提供を先駆的に行って成果を挙げてきた国際教養学部（および大学院グローバル社会専攻）の体制を強化するとともに、各学部において留学生の受入れ数値目標を設定し、優れた外国人留学生（正規生）を確実に獲得する。</u>第三に、主に日本語で授業を行っている学部学科・研究科でも、<u>英語による授業科目を現在の250科目から350科目程度に増やす。</u>これにより留学生が国際教養学部や新設の英語コース以外の授業も選択しやすいうようにし、既存・新設の英語コースの学生にとどまらず、全学の学生が留学生と共に競い、相互に刺激を与えつつ学びうる環境を作り出す。第四に、<u>日本語教育センターを開設し、日本語で学ぶ留学生の増員を図るとともに、英語で学ぶ留学生に対しても日本語教育の更なる充実を図る。</u>第五に、交換留学生増を図る他、1960年代から始まり、現在、年一回開講している日本・アジア研究をテーマとする<u>英語による夏期講座（サマーセッション）を複数回開講し、短期留学生の受入人数を拡大する。</u>さらに、科目等履修生や外国人研修生の柔軟な受入れ、協定大学等からの依頼に応じたオンデマンド講座の提供などを通じ、留学生受入形態の多様化を図る。第六に、留学生受入れのための環境整備については、マルチリンガルな相談体制、奨学金の整備、就職支援等の面で格段の充実を図っていく他、1,000人収容規模の宿舎を建設する。</p> <p data-bbox="159 1836 1436 2139">他方、海外での取組としては、4つの国・地域を留学生受入重点国とする。すなわち、<u>アメリカ合衆国、ルクセンブルグを拠点とするEU諸国、メキシコを拠点とする中南米、及びカンボジアを拠点とするインドシナ4ヶ国に海外拠点を設置し、質の高い留学生の募集・獲得に努める。</u>このうち中南米、インドシナ4ヶ国については本学のもつカトリックの国際的ネットワークを活かし、イエズス会高校等から留学生を獲得する。中国・韓国については日本語や英語コースをもつ高校と提携し、リクルート活動を積極的に行うことを通じて、これらの国からの本学への留学生数を増加させる。<u>ルクセンブルグ、カンボジアの2つの拠点には大学共同利用事務所を併設し、日本の各大学への留学の窓口としての役割を果たしていく。</u></p>	

【上智大学】

国際化拠点の概念図(海外における留学を促進するための取組、国内における留学生の受入のための取組について、構想の達成目標と取組計画をわかりやすく図示してください。)

長期発展計画
「グランド・レイアウト」

建学の精神
「キリスト教ヒューマニズム」

21世紀の
「上智大学づくり」

教育目標 Men and Women for Others, with Others

GLOBAL COMPETENCY(グローバル化対応能力)を備えた人材育成

【外国人留学生受入を2020年迄に2,600人に】

【日本人学生の海外留学を2020年迄に1,000人に】

- ①海外でのリクルーティング ②渡日前選考
- ③英語による学位取得コースの多様化
- ④留学生本位の強力な支援体制

- ①交換留学協定校の増加
- ②海外留学奨励費の支給
- ③指定校留学制度の創設 ④英語教育の改革

【日本留学を促進する海外における取組】

()内は拠点事務所開設年度

東アジア
[中国・韓国等]
海外版
高大連携推進

中東
カイロに拠点設置済

【受入重点国】

◎=大学共同利用事務所併設

<アメリカ合衆国>
ジョージタウン大学
を拠点に全米でリ
クルート活動展開

イエズス会高校と
の高大連携推進
(2010年度)

<メキシコを拠点
とする中米>
メキシコ国立自治
大学に拠点設置

イエズス会高校と
の高大連携推進
(2011年度)

◎<ルクセンブルグを
拠点とするEU諸国>

日本留学情報の
発信及び短期
留学生の誘致
(2010年度)

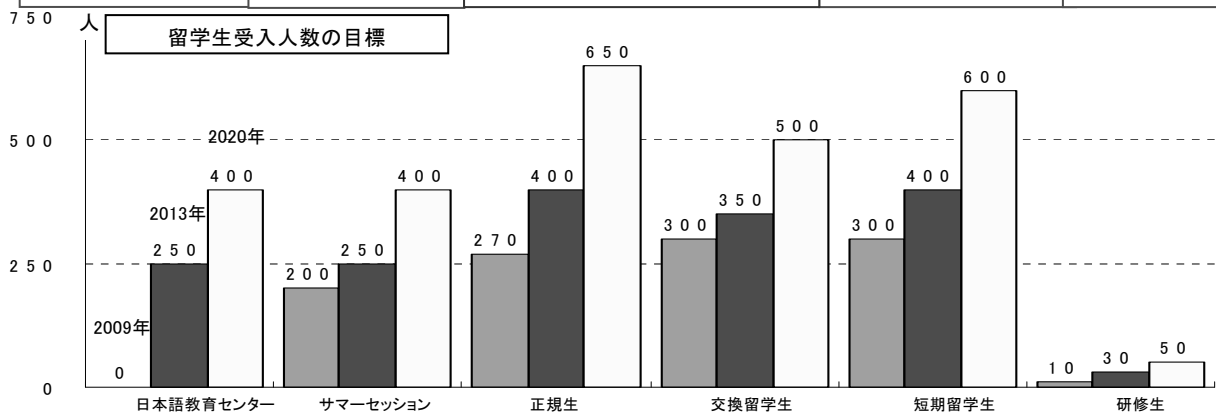
◎<カンボジアを拠点
としたインドシナ4ヶ国>

現地教育の提供及び
ベトナム・ラオス・タイか
らの留学生誘致

(1996年度
アジア人材養成研究セ
ンター開設)

【留学生増に対応する国内における取組】

日本語教育センター	サマーセッション	正規生	交換・短期留学生	研修生
日本語教育を統括するセンターを新設 多様なプログラムを提供	英語による日本・アジア研究の教育プログラム → 年1回から複数回開講へ	1) 英語コース(環境系)新設 ①理工学部 ②地球環境学研究科 2) 各学部の外国人留学生受入に数値目標を設定 3) 教職員の増強	1) 協定校増加 2) 英語で授業を行う科目増設	オンデマンドによる講座開設(ビジネス科目等)



留学生支援体制

入学

宿舎整備
留学生・日本人共住寮建設
1,000人収容

奨学金
総額1億円規模を給付

留学生支援センター
マルチリンガル(英・中・韓)相談体制、就学支援、同窓会機能強化

就職支援
インターシップ、相談・情報提供機能充実、卒業支援

卒業

全学推進・評価体制

推進体制

学長

国際戦略推進機構

学部・研究科
事務局

理事長

(学外)教育研究諮問会議
(学内)長期計画企画拡大会議

評価体制

大 学 名

上智大学

〔採択理由〕

上智大学の国際化においては、他大学に先駆けた国際教養学部における英語による講義をはじめとする国際化に関する取組や、交換留学・国際交流面におけるこれまでの実績は優れており、今後の留学生の受入の更なる充実が期待できる。また、国際化拠点の整備のための構想は、本事業の趣旨に適合しており、カトリックの国際ネットワークを活用したリクルーティングはユニークかつ有効性も高いと評価でき、その実現性も高く、我が国を代表する国際化拠点としての成果と今後の展開が十分に期待できる。

＜特に優れた点、期待できる点、留意すべき点＞

- ・ 受入留学生数は中国からの学生数が最多ではなく、欧米の留学生が多数を占めている点で他大学の状況とは異なる特徴を有しており、当該大学の特性を生かした受入重点国の設定及び受入計画に独自性が見られる。
- ・ 外国人の専任教員数が多く、また、全専任教員に占める比率が高い点は、国際的な教育体制として高く評価できる。
- ・ 理工学部を設置する計画となっている英語による授業のみで学位が取得できるコースでの留学生受入や教育内容等については、当該学部の留学生受入の実績が少数であることに鑑み、留学生の受入の促進のための更なる工夫が望まれる。
- ・ 留学生支援センターなどの留学生受入の組織的な取組について、一層の具体化が望まれる。